

提 言

比べるということ

小林 臻 (社)日本小児保健協会・母子保健推進会議

アインシュタインは世界で最も有名な科学者、物理学者ではないかと思えます。彼の名前を聞くと、誰でも「相対性理論」ということば(論文名)が浮かんで来るのではないのでしょうか。この論文の詳しい内容など全くわかりませんが、専門家に何うとレーザーやコンピューターなどの多くの電子機器、ナノテクノロジーや現代統計学、カーナビでおなじみのGPS(全地球測位システム)など、相対性理論をはじめとして彼が打ち立てた理論なしには、私たちの現代生活は成り立たないといっても、過言ではないそうです。これほどに素晴らしく人類へ貢献している人物ですが、ご存じの方もあろうかと思えますが、子どもの頃のアインシュタインは学校の成績は振るわず、授業中でもぼうっとしていることが多く、「のろま」という不名誉なあだ名さえも付いていたそうです。もちろん他の子どもたちと比べたら劣等生もいいところで、その後の彼からは想像もつきません。子どもの頃の彼を他の子どもたちと比べて、誰もが駄目な子だと決め付けてしまっていたら、その後の彼の素晴らしい才能の開花はなかったでしょう。因子分析の理論家サーストンの、能力の多因子説を出すまでもなく、人間は皆それぞれ他の人にはない能力を持ち合わせています。それは一般に幼少期においては、知能指数で表されるような一元的なものです。発達するにつれて分化し、いろいろな能力はいくつかの独立的な能力が重ね合わされたものと考えられます。しかも能力の出現の時期は各個人によりさまざまで、ある一時期に、とくに子どもの時期に互いをむやみに比べてみても、余り本質的ではないことが理解されます。現代社会は生活のテンポが速く、何でも結果を急ぐ風潮が強いです。子どもに対しては、愛情ある長い目で見守ってやれる心の余裕を持ちながら、子どもにとって本当の幸せとは何かを、今一度じっくり再考してみてもいいかでしょう。



雪ダルマ君と！(隆仁君：小学3年、ニセコにて)

写真提供 小林 臻